

妖劍紀聞 後篇

—

十七日に成りました。

此の日、瀧不動の瀧本院に會しましたのは七人だつたさうであります。主人別當を合はせて八人、客の中には、例の一煎さんをはじめ、玄之進。玄之進は高松清三郎を伴ふて居たのであります。

お約束の點茶に續いて、別當が心入の午餉が濟む。こゝで膳を引いたあとを、何うしたのでありますか、暫時別當が顔を見せなく成りました。申すまでもありません、座に主人の席が空いたのであります。ために引續いた四方山の話も、一寸霧が掛つて、薄い幕に包まれたやうに成つて、客たちは取つてつけたやうに庭を見、畠を視めながら、いゝ陽氣でござる、などゝ、今日の天氣、昨日の風、秋の成熟の噂をはじめ、彼方此方にトンと灰吹を敲く音。其の蓋をきちんと仕直す人物。煙が香のやうに靜に立ちますなど、何處かでカタ／＼と歌仙が裏に成る合圖のや

うな蛙が鳴きます。玄之進の折目高な袴の居坐を直すのが、しゅツ／＼と聞こえました。

處へ、ー

「御免。」

と先づ更まつた聲して、隔ての一枚戸の扉を開けて出ました、索傳と言ふ、手足の節くれだつた逞い別當の扮装が、羅漢のやうに目覺しい。

いや目覺しいも品によります。餘りの事に一同が此は、と目をニりましたのは、索傳法印眞裸と申して、宜しい、袖なしの肌襦袢唯た一枚に、禪ばかり。

氣が違つたのかと思ふと決して然うでない。更めて仔細を聴いて、いづれも襟を正したと言ふのは、不動明王の膝下に、清淨潔白なるべき垢離場とも憚らず、人を溺らし、生命を奪ふ、大鉛盤小鉛盤に對する這個法印の覺悟なので。

よく見れば分ります。．．．豫て用意をしたものらしく、肌着にも禪にも、漆を黒いほどに刷い

て、且つ禪は二重に締込み、そして其の上から確乎と腹巻をして居ました。

いづれも、それ／＼お聞及び、又御覽の通り、當不動堂は白日狐の鳴くばかり寂れました。如何なる、魔魅か、妖怪か、如法暴威を恣に仕る段、・・・守役の別當、拙道心外に存ずる。朝夕明王の左右に事奉り、憤怒の現相を拜するにつけても、等閑に棄置く次第には相成りませぬ。仍て、つら／＼分別いたし、今日は倒に水を潜つて、怪しき淵を探りまする覺悟。

御列座、拙道は、法といひ、術と申し、更に得た處も候はねど、愚者の一得、水練だけは、聊か心得がござる。が、決して退治るなど、申しますまい。希くば、たゞ、魔障の正體を見届けたく、其の上にて又施すべき手段もあらうやに存ぜられます。

就きまして、大鉛盤小鉛盤の幻怪を探ります今日、茶に托せ、執方をお招き申したは別儀でもござらぬ。初手は唯拙道一存、世間は固より誰方にもお知らせ

申すまい、と存じましたなれども、五人七人に止まらず、もぎつて胡瓜を喫ふ如く人命を断ちます、恐ろしき怪物、もし其のまゝに一命を奪はれまして、拙道の亡骸空しく水に浮びます時あやまつて、溺れたとならば、うつけ者でも事は濟みます、なれど拙道とて二つない生命の惜しさ。野武士に剥がれた體に恚やうな身支度をいたし居る。――這奴、したり顔に似非法力のひろめをば思つき、一堪もなく怪き神に肝を抜かれたと沙汰されましては、名聞がましきだけ實に心外。……偏に明王の御威徳を蔑にされます無念さに、堂守の身として、棄置かれず、故とではござらぬ、餘儀なく魔の穴を見届けます、此の次第を、御列座お含みおきを願ひたう存ずる。

此とてもでござる。いや、法印、世に言ふ暴虎憑河の類、其の思つきは悪からう、朋友の效に意見をする、止まれ、とおほせらるゝならば、拙道速に止まります。願くば、微衷御推察下し置かれて、假にも、氣張るぞ、後見せう、索傳首尾よくせよ、と言のお助太刀を下さらば、身に取り此の上もない本懐。

實は催が催、話の會と申すのに、目の前に、其の大鉛盤、小鉛盤を控へながら、朝よりいたしまして、故と一言も魔の沙汰を申さんだは、かやうに、不束な身支度して、覚悟のほどを御覽に入れ、其を汐に直ぐ様飛込みませうと存ずる、切詰めました考へでござつた。が、扨て人間の果敢さは、一大事と存ずるにつけて、内々ではござれども、茶も飯も、碌々口には入りませず、今以て動悸がこれで、

と袖なしの肱、脇腹のあたりまで、太い毛のすく／＼と生へたのが、胸を抱へて、額を撫で、

「卑怯千萬、恥入りました。」と總髪の頭をひたと俯向けました。

膝を露呈に畏つて、大漢の澁面なのが、禪一つの状態。慌てゝ見ると湯屋の番頭が戸惑をしたやうな、不状に滑稽けた形が、其の恥ぢ、且つ悄れたがために、今は却つて謹嚴莊重な趣を添へたのであります。

一座は息を飲みました。

疊が一側颯と蔭つて、窓越の崖の目白の森に、薄い雲がかゝつて、雲から落すやうに大洗堰が響きます。

玄之進にも沙汰をして、豫て此の期待があつたゞけに、一煎坊が、先づ拱いた十徳の袖を徐に開いて、

「先達、立派な御覺悟ぢや。成程、其のまゝに差置かれては、不動尊の御威光にかゝはりませう。別しては、御公儀へ對する一廉の御奉公に成りますな。既に人民を思召す廣大なるお慈悲から、大枚のおもの入を顧みさせられず、一度は埋潰しに相成つた穴に、尚ほ潜んで、彌が上にも命を斷つと言ふ魔障のもの、先達が此をお見届けなさる儀は、天晴れ公の御記録にも留りまする儀、無二の御忠節かと存じますよ。御公儀に於かせられても定めし御満足。」

と一座の中にも、此のくらゐな御徳川家はありません。で、御公儀と言ふ毎に、確と、堅く火鉢の縁

を壓へる時、手尖と頬がぶる／＼と震へます。

「蟲が知らせるとか俗に申す、今日の會と言ふのは、實は恚うした心組のやうに、．．．豫てな。」

と鄰席の玄之進に、頬の其のぶる／＼で傳へますと、玄之進が頷いて、袴の膝を掴みながら、

「いや武士も及ばぬ、お勇ましい事だ。偏に御本懐、御成就の儀をお祈り申す。」

「重疊にござる。」と更めて總髪を下げて會釋しました時は、最早や決行の勇氣が満ちて、索傳の腕は自から疊に跨つて突張つたのでありました。

「然らば．．．．」

「あゝ、法印様、よく、お氣をつけなさいまし。」

と此の時、末座から靜かに、しかし心の籠つた聲を掛けたのが一人あります。小紋の羽織、博多獨鉆の袴しつとりとした上品な人柄、目の清いのも、鼻

筋の通つたのも、面長な割に心持頭の短く、ふつくりしたのも、不思議に清三郎とよく肖て居て、兄弟が、否々、面影のために若くは見えますが、年配は彼これ清三郎と父子かと思はれますほどであります。が、所謂他人の空肖、血統に何の縁もありません、彼は越の國の鍛冶の孤兒。―― 扨て此は東都の名優、大倭一流と當時のもの、本にも唄はれました、今も錦繪で御存じの阪東彦三郎なのでございます。

―― 此の話の編者は、生憎梨園の知識に乏いで、此の俳優の一代についても悉しい事は存じませんが、香、花、茶の湯、連歌、雑俳風雅の道を深く嗜んで、家も山の手に閑居して、俳號、たしか高谷高彦と言つたさうで、一煎とは豫て昵懇、其の茶話の會の縁から芝居の隙を、丁ど此の座に居合はせました。

遠山瀾閣、青木一夢、福王盛翁など、言ふ、當時の風客騷人が、いづれもこゝに同席をしたのであります。

篇者は、はじめ此の話を接しました時、實はせつかくの大和屋、たゞ此の席へ顔を出すだけでは飽氣ない。非人廓の鳥追お町と、大洗堰の大鉛盤小鉛盤の不思議に合はせて、彦三郎の情話でも拵へましたら、嘸ぞ御婦人のお氣に入つて、嬉しがられる事だらうと存じましたが・・・事實は然うは参りません。

しかし　　お喜びなさいまし、彦三郎に一寸した見せ場があります。

其は、此の日、不動明王の尊像の前に於て、法印の面に、此の名優が、繪筆を取て、謹んで跪いて、制二迦童子の隈取をしたのでありますから。

一旦挨拶を済ませますと、扨て、此の上一具、尚覺悟のほどを御覽に入りたいものがある、と言つて法印が、

「何うぞ此方へ。」

一同を、一寸した廊下つたひに本堂へ導いたのであります。覺悟々々、と重ね、如何にも事々しいやうに聞こえますが、其を言ひます索傳の態度が、如何にも謙遜で、然うまでにせねば成らない自分の勇氣決斷の乏いのを深く恥入ると言つた心の見えませんが、此際、却つて輕學妄動でない頼母しさを、人々の胸に點肯かせました。けれども、渡る廊下の下へは、最う大洗堰の水の音が迫ります。それを初夏の風情とは誰の耳にも聞こえなく成りまして、九歩僅に十歩、三四間とは隔りません本堂までの間さへ、青葉に奥深く遠い處のやうに思はれたのであります。

御目ざし爛々として射るが如く、且つ手を柔かに

劔を取つた、御丈五尺と言ふ大明王の立像　――  
左右に制三迦、矜羯羅の兩童子、焚かねど護摩の黒  
雲に、火を迸らして拜まるゝ、厨子は開いてありま  
した。

こゝに焚かない護摩壇の、水の如く、冷く塵を拂  
つた上に、一口の笛巻のヒ首が、提緒を捌いて据え  
てある。

「此でござる。」  
と法印が、丁と取つて向直ると、客は、ぴた／＼  
と押据えられたやうに坐に着きました。

「お武家の前で、これは些と出過ぎました。」  
「いや／＼。」

目途に向はれ、玄之進が會釋を返しました時に、  
索傳は戒刀を左の手に、横構へに取直したのであり  
ますが、ふと後見らるゝと言つた體で、高く御厨子  
を仰ぎました。　――　振返つて、

「親方、」

と言つて大和屋を呼びました。

「些と折入つたお願がござる。」

「私に。」

「え、お笑とあれば、それまでぢやが、手前の面を、明王の御相好に繪取つては下さるまい

か。．．．．何とも恐入つた事で。」

< と御厨子を斜めに、兩手を支いて畏つて、

「推參千萬、罰の當つた儀ではござるが、御威徳を頂きたい。此はしかし、豫々期した事ではござらぬ。偶と唯今眼が明かに成りますやうに思着きました。や、然れば、如何なる魔魅變化も、一睨みにいたしくれませう。何といづれも。」

と今までになく勇立つた勢に、膝を叩いたものさへあります。

「其をぢや、何として早く思着かれませなんだ。

いや、今お心着きなさつたは、御修驗、貴方に不動尊のお告げであります。さあ、親方。」

と一煎坊が促すに連れて、一同が彦三郎を熟視ると、此は黙つて俯向いて居りました。

「大和屋さん。」

「はい。」

と、未だよく顔を上げないで、

「お恥しうございます。」

と唯言ひます。

一煎坊が、

「何としてな。」

「法印様、唯いまのお思着は、此上もない結構な事でございますが、私には役が過ぎます。力が足りません。」

「否。否。」

「いゝえ、恚やうな場合に、餘計な御辭儀や、無駄な口上を申上げるのではございません。全く手に餘ります。」

漸と顔を上げて、拱いた手を解きました。

「しかし、其も、芝居をせよ、とあつて、樂屋で拵へますならまだしもでございます。此のお不動様の其處に見ておいでに成ります前で、何うして私が勿體なくつて逆も眞似は出来ません。唯、斷つてと仰せで、其の上、この未熟さをお厭ひでございませんなら、お脇立のなら寫して見ませう。」

「彦三郎に最う役でございます。」

其はあり合はせました墨と朱で、彦三郎が精神を籠めて、制二迦の異相を隈取りますと、眼圓に、面赤く、齒皓く、耳蒼く、髪も自から渦を巻いて見えました索傳が、いで、膝を立て、鞘を拂つて戒刀を屹と抜持ち、ずいと身を起したのが格天井を抽くばかり、何となく巨人の態が備はつて、本堂傍の開扉から「其處がすぐに石壇を、」むづ／＼と踏んで下りて、大洗堰の垢離場を渡つて、ざぶ／＼ざぶ、祭禮の荒神輿を躍出たやうに、どつと水を亂しながら、魔の鉛盤を睨んで立つ。と續いた一同が、石段の上下に「其處に脱棄たた藁草履は、反つたり、歪んだり、向ふへ飛んだり、轉つた

り、かびが生へたり、じとノノと濡れたり、亂雜に散らばつたのを、直して穿いたものもあれば、うつかり足袋跣足で出たのもあります。――蘆間擦の肩、壇の胸、開扉を覗く顔などを、顧みて、じろりと視たのが法印の思切つた挨拶で、横にヒ首を口に銜えたと見るや否や、――大洗堰の兩の瀧をじだんだを踏む脚にして、岨の森の流に映る亂れた頭髮を倒に、眞仰向に寝て、底ひなき二つの眼を雲に渦巻く――偉大なる妖魔の其の一個の眼の裡へ、

「咩！」

と背を高く頭上に印を結ぶと齊しく、索傳の面は化鳥のはたゞくが如く、水を嚙んで渦の中へ――

「那は。」

と背後に立つた玄之進が申しますと、

「小鉛盤で。」

と、其の時一煎坊が蘆に低く居て答へました。

此は又、飽氣のないほど、やがて、すぼりと索傳

の體は易々と浮いて立つて、雫も切らず面を振りむ

「浅いわい。」

と言つた、聲の下に、再び匕首を口に

「咥！」

と結ぶ、あゝ、其の指の尖を取つて銜えはせぬか。

近々と鳥が鳴いて、水よりは、蘆に臨むだ岨の森の、

ざわ／＼と上枝さがりに梢から鳴らす羽音。

大鉛盤は、颯と薄白い光を放つて、法印の姿は見

えず、空には雲が掛りました。途端に大水車の響が

だう／＼と亂れて、もの音、人聲、一町餘り隔つた、

其の小屋の裏岸へ、はら／＼と出て人の立つのが

見えました。

裏庭の垣には、一個きよろつく此の堂の老僕の皺面。

其の瞬間なのです。

一煎坊は咽喉が乾くか、息苦しいか、それとも或

は、恁る際にも風流の嗜か、蘆の根の水を指に浸し

て、一掬唇を濡したトタンに、思はず腰刀に反を打つて、渦を凝視めて居た玄之進が、

「何だ。」

と一喝、

「其の状は。」

傍に引添ふた美少年が、唯其時、小袖をふいと投遣りに、兩方懐手をして立ちました。其の風采が、此の場合に、餘りだらしもなく、仇めいて、不埒に放縦に見えたからであります。

「あゝ、旦那。」

すぐ背後の壇に居て、こゝで彦三郎が清い目をし

て、  
「間に合はねば引斷るか、脱棄てるかなさいます。若旦那は、法印が驚破と云ふ時、水へお飛込みに成るお心でございますよ。」

「此の少年は、……今しがた法印がヒ首を手に本堂を立ちました際に、

「若いものぢや、お相伴は何うかな。」と、半ば戯のやうに、玄之進が言懸けましたのに對して、  
「可恐うございます。」と膠もなく申しました。

「弱いな。」

扉を出さうにした法印が、

「おゝ、お嗜みでござる。水泳は定めて御鍛鍊。

いや、知らぬ土地の水は淺うても心なく入らぬが泳ぐものゝ掟でござる。」

と更めて目禮したのでありました。――

わつと上る鯨波の聲。

濡簀の如く、水草を青く身うちに絡ひましたのが、毒龍を搦んだやうに見えつゝ、蒼き釣鐘の浮いた如く、索傳は、魔の淵を――血だらけにも成らないで、夕陽に映じて顯はれる。

唯見ると、口に啣えましたヒ首の光と十文字に、キラリと別に一口の短剣を、半ば閉ぢた瞳で守護して、眉に捧げて立ちました。

生死しやうじの間にあひだ、法印はふいんが先まづ沈しづみました小鉛盤こすりばちは、思おもつたよりも浅あさいくらゐで、目めの届とく限かぎり透通すきとほつて見えながら、一物ぶつのあつて瞳ひとみを遮おほるものもなかつたのであります。

一旦たんうきて浮出うきでて、更さらに大鉛盤おほすりばちに向むかつて水みづを被かぎ、驚破すは沈しづむとすると、はじめ五六尺しやくの間あひだは水みづが微温湯ぬるまゆのやうに暖あたいのであります。次第しだいに深ふかく、一丈有餘ぢやういうよの間あひだ、其その冷たさ。豎たてに氷こほりを割わるやうで、手足てあしはすくみ、舌したは縮ちぢみ、銜くはへたヒ首あひくちも凍いてつくかと思おもふばかり。實げに／＼紅蓮ぐれんだいぐれん大紅蓮だいくれんも恚かくやと骨髓こつずゐに冷透ひえとほる。・・・・・。扨さてこそ此これがために多おほくの人は凍こえ死しぬかと思おもひ／＼、身みはたゞ大だいなる石猿いしざるの如ごとくに成なつて、水面すあめんをば、さながら叢雲むらくものやうな高たかさから、づゝんづんづゝんと落おちて行く。・・・・・。最後さいごと觀念くわんねんしました途端とたんに、梅うめが咲さくやうにほんのりと爪尖つまさきから五體たいを包つんだ。水みづが又また一層そうあた暖なく成なりました。

快こゝろく、爽さわく、柔やわな湯ゆと言いつても可いいくらゐで、然しか

も滑に、撫擦られます心地がして、恍惚と蘇生る、  
其の間が更に二丈ばかり。

底に疊數凡そ五十丈、廣々と平かな一枚の大巖の  
面が、銀を敷いたやうに清らかで、忽ち明く成つた  
のであります。が、蹈んで立たうとすると、取つて  
投られたやうに、迂りました。一面の青苔で、藻と  
も、草とも、桂とも、蓬しく、丈も長さも計られぬ  
まで生伸びたのが、緑青の色を凝らして葉一筋動く  
ともなく、寂然とした、其の物凄さと言つたらあり  
ません。心積りに、丁ど大洗堰の瀧の下と思ふ處が、  
突當り絶壁の形をなして、其處に横穴の、空洞の恰  
も支那の榻を一個刻んで据えた宛如なのがあります  
た。唯其の座に、天鷲絨を重ねた状の、同じ緑の苔  
の、ふうはり濃い中に、燦然として輝いたものが  
あつたのであります。

口では言ひますが、法印が底へ沈だのも、白銀に  
似た巖の疊に、足を掛けやうとするや否や、俯向け  
にのめつたのも、殆ど同時で、阿と亀の子這に腰が  
浮いて、早や鯨に化つたかと思ふ、漂ふ黒い目が、

其の光りものに射られたので、ハツと見ると、まこと人に手して据ゑましたやうに、一振の明晃々たる短剣が坐つて居ました。

此の窟の裡の處々は、水の湧口と見えるのです。ちら／＼と紫の美しい珠を群らして、其が、劔の刃の牙、焼、匂を、現象的に颯と散らして、水草の本末に不思議の花を咲かせた、と言ひます。

―― 後に清三郎が、我が求むる生命にもかへ難きものがあつて、同じ處に沈んだ時は、必ず大鉛盤の水底を湧いて玉散る紫が、杜若の花を其の瞳に鏤めたらうと想像されます、しかし其は追ての事

四

法印索傳は、其の咄嗟に、呀、此の劍こそ人を取  
 る、妖魔の化身、暴神の本地であらうと見て取りま  
 したので、龍孫を握む勢で、我を忘れて柄を取ると、  
 巖を搏つて躍上つた。――煽つた水に、むら／＼  
 と靡く水草のうねりを打つのが、うしろを毒蛇の追  
 ふ心地。浮出る際の可恐しさは、なか／＼に沈む時  
 のやうなものではなく、草の末はねば／＼と、臀、  
 腋を擦つて、こゝが水面と思ふ、胴中半分、巻切ら  
 れたやうな、氣がして、江戸川の上流へ顔を出した  
 形相は、傍で視たやうな澁刺たる驍勇の趣は思ひも  
 寄らず、法印の身體は、ホツとして、實際淺瀬に腰  
 を抜いたのださうであります。

――話を進めたいと存じます。

水車小屋の持主半兵衛も驅着ける。所の名主で孫  
 兵衛と言ふのも聞傳へて参ります。此の一夕、護摩  
 壇に其の劍。――一尺一寸、塵一點の曇もない氷  
 の名刀。――を据えました本堂には、居流れる、

座を籠めます、膝を詰める。……所へ近所だから水車小屋半兵衛が煮染物、酒、鯛など寄進して、宵宮のやうな其賑。婦小兒も立集ひました。其の寶劍の不思議さへあるに――御婦人方に一寸内證を申しませうか、彦三郎が居たのですから。

最も、高張を點し、萬燈を點けると言ふ數ではありません、燈明に蠟燭で、陰々とした裡に、何となく不動尊の眼が底光をして、其の魔の穴を出た劍がまだ水も滴るばかりでありますから、鱗のある魚でさへ、つい近いと、もとの水へひらりと飛びます。況して凄じい刃もの、いまに手裏劍のやうに空を切つてサと飛びさうで、氣の弱い人たちは、十日餘の月はありながら、樹かげを盾に遠巻して逡巡する。堂の中にも、誰一人柄に近づいて見たものはありません。最も心あるものは、憶するまではなくとも、忪る劍を、むざと手にすべきではなかつたのでありませう。

時々、小間の用たしに、平八と言ふ別當の老僕が、皺びた影を大きく、ぷら／＼と立働くのみで、多人

數ながら寂寞して、何となく、犠牲を取巻いた丹波の奥の猿神の祠と云ふ趣があつたのであります。

で、座中の相談。翌日は、早速にも、寺社の司配へ法印が劍を守護して届出で、と事が極つて、一同は月と、水と、森の影に、分れ／＼に立歸る。

狐格子は、散行く人を時ならぬ落葉の隈に、寂しくギイと閉ります。……蘆は静に、岨暗く、流は月を走らせました。燈火も消えました。

劍は、不動堂の御厨子に納めて、ぴたりと錠を下ろして、それから法印は別當に寝たのであります。

處が翌朝。

早朝の看經をするのに、先づ御厨子を開くと、に、劍を見やうと、おのが守護する鍵を合はせて、静に扉を、唯見ますと、何と……明王を拜む目も眩むまで、劍は形もありません。影もない。

「や！」

と成つてから、心付いたのでは、昨夜鎖したまゝ錠が掛つて居たのか、いま自分の鍵で開いたのか、それもうつかりして氣が付かぬ。が、居ても、起ても、跪いても、覗いても、劍の失せたのは事實であります。

はツと思つて、くるりと廻つて、又覗いて、昨日拜借した制二迦童子を、忸怩として、恥ぢて視ると、ちらりと、白い齒で苦笑をなされたやうなので、法印は二三度立續けに我が顔を、扱いて、撫でゝ、とぼんとしました。

「平八や、平八や。」

……氣立ましく老僕を呼ぶ聲。

「へい。ふえゝ。」

と言ふ、庫裡の返事を聞きながら、もどかしくて、どゝと出るのと、向ふが來ると、狭い廊下の中途中で、充滿に打撞つて、暫時、どちへも動かれず。

「平八や。」

「法印様。」

「劍がないぞ、劍が、御劍が紛失したぞ。」

御堂、別當、庫裡、物置、家捜しに捜せ、と成ると、こゝは老僕の分別の方が偉かつた――

「考へて御覽なせえまし。不動様の御厨子に錠をおろして藏つて置いて、なくなつた劍がでがす。根ツ子、隅ツ子、棚なんかにはありやう譯がござえませんや。」

「あ、……如何にもな。」

索傳は瞑想して、暫時して、それから二時過ぎまで本堂で護摩を修したのであります。

やがて時刻に、……乾いたばかりの例の肌着、二重の禪、腹巻を緊と鎧つて、面の隈取に及ばず、今度は法印、白布の後顧巻。

一思ひに大鉛盤に躍込むで、底を探ると、不思議や同じ處に、床に靜なる名畫を視るやうに、此が夢かと思ふまで、劍は澄まして光つて居る。取つて難なく泳出しました。

「それだ、あゝ、恐怖えなあ。」

然もあらむと、期したる體で待ちながら、平老僕は、今更のやうに色を變へ、伸ばして待つた首を縮めて、身の雫を切り法印の裾に居つゝ、蘆の汀に蹲んだのであります。

今夜は觀世掾を堅くして、水中の劍の柄穴へ透し、明王の臺座の透間へ潜らし、二重に確と結んで、如法扉をひたと閉し、がちりと錠を下ろし、不安の一夜を過ごしながら、まさかと思ふと翌朝――

「南無大聖不動明王。」

厨子を開くと、影もない！……弱つたのは、觀世掾がよろりと抜けて、臺座の下に落ちて居ました。

「平、平、平や。」

「おう」

と、老おや僕ぢは、もう、通かよひ口ぐちから、皺しわ面づらを、黙もくと出だし、  
及およ腰こしで、おつかな吃びく驚くりと言いふ體ていで覗のぞいて居ゐまし  
た。・・・

「そ、そ、そりやこそだ・・・法はふい印しん様さま。」

五

参詣の殆どない堂宮は、晝も空屋より寂いもので  
 す。去年一昨年引續き、往來の途絶勝だつた瀧本院  
 の一土手は、今年分けて大鉛盤小鉛盤の多くの人を  
 取つたゝめ、陰で噂するのさへ憚られた處へ、いよ  
 ノ、穴の魔主が顯はれたと言ふ。・・・それも  
 川牛、河太郎、聞くもおどろノ、しい水熊などの變  
 化にせよ、淵を握出されて不動堂に封ぜられた時が、  
 即ち退治られた時なのでありますから、人は安心を  
 して然るべきだつたのに――生類ではない切も  
 の刃物、然も鋭い刃で、あまつさへ其が自由自在に  
 空中を飛行する、・・・堂の中から自から魔の  
 穴へ歸るには空を飛ばねばなりません・・・と  
 すると、辻で剃刀の落ちたのを見ても憤然とせず  
 は居られますまい。  
 それが一度ならず、二度ならず。

で、いつか近まはりでは聞傳へて、館屋の太鼓に  
 ついて行く小兒を、驅出して親たちが留めるまで、  
 水車小屋の邊へも近づけなく成りました。

屋棟へ、グサと刺つた白羽の矢ぢやありません、刺さうとして空に舞ひつゝ、絃は既に放されたのでありますから。

蛙もひそんで、蝙蝠も飛びません。明い日ながら水気を帯びて、靄の、暖くぼつと白い、水車小屋の横手なる瀧本院の土手を一人。

此の三日めの日暮前に、黒小袖に茶宇の袴した、前髪立の少年が、袖を合はせて、うつむいて靜に通る。姿容の綺麗なのが凄いやうに見えました。

一步づゝ、靜に道を踏むかとすれば、ふは／＼雪駄の軽さうな、瞳は一方にのみものを凝視むるかと思へば、そよがぬ蘆にも揺めく衣紋。落着いたやうな、胡亂つくやうな、身を忍ぶやうにして居る、そして姿は見せないやうな香をかくせば色に出で、色をかくせば香に顯はるゝ、たとへば、咲満ちた桃櫻の、風なきに人知れず散る状は、あはれ、魔劍のために的に立つ、操らるゝ犠牲の、彷徨ふかと疑はるゝ。．．．よし其とても厭ふまじ。

憧憬るゝ身は誰も恚くこそ。高松清三郎は、ものに憑かれたやうに成つて、唯うか／＼と來たのであります。

密と境内へ入りました。

手水鉢の傍に、芥子より蕃椒を植ゑたさうな、瓦圍ひの小さな花壇がありました。何が咲いて居ましたか、それ處ではありません。御手洗の水に杜若の影のないのを、然も本意なさうな顔して、前髪で、額を仰いで茫乎とイみました。が、ふらりと進んで、壇へ片膝を支くと、ツト刀の鞘が伸びました、袖の紋をうつくしく絞つて、色白な片手を狐格子の扉に掛けると、内から緊はしてありながら、緩く三寸、合せ目が透きました。

唯見ると、ハツと胸を反らして退つたのであります。御本尊が辨財天、もし女體にてましまさば、立處に目が潰れたかも知れません。

焚きしめた護摩の何となく、霞を籠めた墨染の羅に包まれて、賽銭箱に、腰の半ば、蔽はれましたが、

撫肩なでがたの滑なめらかに光ひかりある雪ゆき、島田鬚しまだの艶つや、透すきとほ通とほる脊筋せすぢも  
あらはに、白身はたかみのけやけき婦をんなの背後うしろ向むきに坐すはつて居ゐた  
のが、其そのありさまに、不意ふいのもの音おと。心こころを空そらに鬢びん  
を揺ゆすつて、驚おどろいた状さまにスツと立たつ。と細腰ほそこしの紅くれなゐを絞しぼ  
つて劃くぎつた、乳房ちぶさを兩手りやうてでおさへ状さまに、搔かいすくむ  
と見みえた片頬かたほが、ふくらかな二の腕うでにひたとついた  
横顔よこがほ幽かすかに、チラリと斜なぐめに見返みかへりました。其その鼻筋はなすぢと  
匂におやかな長ながい眉まゆに、前世さきのよからのやうな覺おぼえがありま  
す。

清三郎せいざうは退すさつて、退すさつて、退すさつて立たちつゝ、ぶる  
／＼と震ふるへました。

とばかりで、扉とひりのうちには、そよとの、ものゝ氣けは  
勢ひもしません。

まさかに其それとは思おもはれますまい。・・・幻まぼろしか、  
夢ゆめか、ふと我われに返かへつた心こころがすると、姿すがたは消きえつゝ、  
消きえるにつれて、急きふに四邊あたりが薄暗うすくらく成なつて、黄昏たそがれの  
來きて迫せまるのが目めに見える。

六

其の、其處にも見える、黄昏の、本堂わきなる廊下の外の、まばらな竹垣の木戸中から、皺面を出して差覗いたは老僕どの。

夢見るやうな少年の目の行くのと、はたと合ふと、垣の外へ、大きな蝸牛が伸びた形で、恚う、其の陰に手を出して、絲瓜が化けたやうに、恚う、其の頻に招く。

此處へ、此處へ、と呼ぶのが、恚う、其のぱちくりと目で動く。

何やら其が、其處に自分の居るのが、然も可恐るべき危険に臨むで居る事を告知らせるやうに取れたので、急に慄然と可恐く成りまして、清三郎は、ハタと吸込まるゝやうに、靄ある木戸へ入りました。

「爺やさん。」

古半纏の袖を圓く開いて、一步退りながら庇ふ形に迎へた平八。

「はう、此間こねえだの、大塚おほつか様の若旦那わかだんな。」

## 七

「法印様は、あひにく留守でございませがね、へい、え、然やうで、……矢張り、劍の事でござえますよ。最うね、お前様。」

と、ぼけた、風にも年にも似ぬ、ものいひのきび／＼と鐵拐な老僕で、「二度まで然うやつて水中へ勿返つたくらゐでがす、何うもこりや、人間の手ぶしにおへるもんぢやあねえ、密としてお置きなせえまして、私が言つたんでござえますが、法印様は肯きませんや。續いて無事に泳いで出たんで、然した事もなく言ふやうなもの、はじめ大鉛盤へ飛込むまでの心を察しろ、一月や二月で覺悟の極つたやうなもんぢやない、……とね。……愈々と成つて茶の會を開いたも、内々は懇意な方にお暇乞だ。それまでにして取つて返つたものを、三井寺へ行かう、お、然うか、と見て居られるか。慾得や外聞ではない。あまたの人を殺した禍の根を断たうと言ふのぢや、取戻さずに置かれるか。

— 此がお前様、今朝の事だよ。

今もお話し申した通り、一昨日の晩と昨夜と、二度まで飛出された今朝なんでごぜえやす。最うお前様、底の勝手は知れて居ますから、法印様は、今日も飛込みましたがね・・・考へりや強勢だ。ものは三度めだ、お前様、そのくれえな通力のある剣だもの、どんな崇をするか知れたもんぢやあごぜえませぬのに。——

不思議にね、又法印様が剣を握つて、無事に泳いで出ましたよ。だが、尋常事ぢやあねえてね、誰か、持つて行つて置いたやうに今度も矢張り、巖底の同じ處にごぜえましたさ。處で、首尾よく三度まで手に入つたのでごぜえやす。が、此奴を何う處置するかと成つた處で、法印様も迷ひました。すぐに日の中に御司配へ持つて行けば、それで一も二もありませんかね。何しろ其の、勝手の知れねえ飛歩行を行る可恐い刃ものですがすで、然うでもねえ、途中どんな事があつて、往來の人に怪我でもさせちやあ大變だと、心配をするの氣をくれがしましてね。尤でこ

ぜえます。一層こりや今度も御堂に藏つて置いて、  
空手で御司配へ出向いて、相談をして、御司配から  
検分があるものか、それとも途中は構はない、持参  
せいとおつしやるものかね。……とに角、御  
内意を窺はう……。其の上で、と言ふ事で、其  
がために、へい、法印様は出掛けまして留守なんで  
ござえましてね。」

「そして、劍は。」  
と清三郎が訊きました。

「其でござえますよ。……御厨子に入れて  
鍵を掛けて置いてさへ飛ぶものを、それぢやあ、お  
前様、別當にも庫裡にもおしまひ處はござえますめ  
え。平八、ぬしが持つて居る、俺が歸るまで。……  
……串戯ぢやあねえや、法印様、眞面目で言ふん  
だから、驚きましたぜ、お前様の前だがね。」  
と頭を搔いて、

「串戯ぢやあねえ。――失張りお不動様にお  
預りを願ふより法はねえ。が、昨夜はお臺座に結へ

置いたから魔ものめが透を得たに相違ねえん  
で。・ ・ ・ ・ 勿體ねえが、ぢかづけお身體の何處  
か拜借しやう。然うかつて御足にも、御手にもね、  
いきなり結つけるのは恐多からうツて事で。お不動  
様が腕で以て。・ ・ ・ ・ それ、あの御劔に、縦に  
合はせて結へやう。これぢやあ、さすがに身動きも  
出来めえ。―― と此奴あ私の分別でね。――  
何しろ河童だ、お前様。・ ・ ・ ・ 狐、狸、古猫  
なんぞ、化けても變じても、魔術を放いても、弓、  
鐵砲にや叶ひませんや、すぐに退治られて、化の正  
體をあらはしますが、昔から、此の天狗と河童の死  
骸に成つた話を聞かねえ、手に負へませんや。坊主、  
山伏、琵琶法師、・ ・ ・ ・ お前様の前だがね、美  
しいお若衆なんぞ天狗の化ける得手もので、鯉、大  
鯨、鮒、鰻で血氣なものを誘込む。・ ・ ・ ・ 錦の帯  
だ、金の簪で女を引くか、金魚と見せて小兒を釣る、  
此が河童の腕でがしてね、對手が法印だものだから、  
寶刀、御劔と企みましたさ。そんな其の怪しからね  
え大鉛盤の主だつて、不動様の劔に縛られては、今  
度こそ目ぱたきだつて成るもんか。・ ・ ・ ・ でね。  
何しろ御像に觸るんでござえますから、法印様の在

所、川越の在方でございますが、――其處から到  
來もの、新しい麻苧を、一度護摩で清めて、此を其  
の、私が扇の二枚絲ぐらゐに拵つて、ぎり／＼と二  
重にも三重にも、劔と一所に結えて置いて、其の上  
で錠を下ろして、確り留守をせい平八、で以て、法  
印様は八ツ頃出掛けましたんでござえます。

だがね、や、一人に成ると心細いや、お前様。大  
丈夫とは云つたものゝ、對手が對手だから、何時ど  
んな事を仕出來さうとも知れねえんで、氣に成ると  
お前様、可厭に忤う寂寞として、朝夕聞馴れた大鉛  
盤小鉛盤の鳴る音が、時々、ガツと遠雷のやうに、  
あれだ、あれでございやす、眞個く凄いでござえ  
ますよ。

清三郎は、茶會のあつた座敷の縁に、腰を掛けて  
聞いて居ました。

「爺やさん、では、其の劔は、唯今、御厨子の裡  
にありますね。」

「え、／＼、あります。……あります筈」

で……ごぜえませんがね。」

と嚏を堪へた顔色で、老僕は、くしや／＼と鼻を撫でます。

「然うかねえ。」

と、何故か、木に竹を接いだやうな事を言ひつゝ、  
「一刻から話を聞くうちも、座敷越裏窓の開いた處から、うか／＼と目白の崖を視めて居ました。十七日の茶の會の時も、實は、人目に薄茫乎と何うかしたやうに見えるまで、矢張り其處を視めて居ました。」

椿八幡の大銀杏は、此の時、夕靄に高く裏まれて、梢は雲を漕ぐ帆柱のやうに差覗かれます。

偶と思出したやうに、

「お爺さん、私は實は拜見に参りました。」

「何を、あの劔をでこぜえますかね。」

「此間の晩のね、あの時だつて、手に取つて、焼  
匂鐵色を拜見したかつたのでございます。けれど、

お老人もおいでだし、然るべき、お人が多いのに、  
こんな若輩で居て差出がましくつて、つひ遠慮を  
しました。今日ね、其の事を言出して、玄之進様にお  
暇を願うと、主人は可厭な顔をしました。御機嫌が  
悪かった。……餘計な事だけれども、私は刀  
鍛冶の悴で、矢張り親の職を覺えたいのに、主人は  
能役者に成れと言ふので、――氣に入りません。

けれども、あゝした不思議な劍だから、どんな鍛  
がしてあるか、話のたねに、それも聞きたい。……  
……眞似でも其の道にたづさはつたものだから、  
私何が珍らしい事を見出すかも知れないと言ふ  
氣があつて、満更でもないから、行つて參れと、主  
人に許されて出て來ました。こんなに暮方に成つて、  
氣の毒に存じます。」

「何、お前様。おゝ、そんな事でお邸が出悪くつ  
て、道理こそ御參諸にやあ、些と暮過ぎると思ひま  
したよ。」

「否、それは、……邸はもつと早く出まし

た。けれど、少々道草をしたものだから。」

と正直に言つて、些と疲れた色をした。何を隠さう、清三郎は此處へ来るより前に、目白の峠の非人廓を志したのであります。が、一人唯不動堂の法印にも、腹を探られやう、面羞さに、知つた道の、此處を通らず、杜若の花の咲く處へ、といつかの歸道だつた目白臺を心當てに、小日向の方から廻つては、幾度も人に尋ねました。――目白の拔道、目白の拔道――恚う掴んで振廻はされるやうに、あち此方を、ぐる／＼捜歩いたが、遂に尋ねあぐんだゝめ、廻り廻つて不動堂へ來たのであります。

今思へば、椿八幡、と言つて聞けばすぐに知れたものを、と清三郎も口惜く思つたに違ひない。戀は心の暗まぎれ、道に迷ふのなぞは何でもない。

「それぢやあ、錠が下りて居て、法印様がお留守では、拜見は出来すまいね。」

「や、若旦那。それは大事ごせえません。――

御厨子の鍵は、恸うやつて、

襟のよぢれた懷中に――

「預かつて居るほどでござえましてね。……  
ありやうは留主の中に、二度三度も開けて見るのが  
役目なんで、實の處は、老僕、本堂で番をしる、で  
ござえましたが、薄氣味が悪くつて寄りつけません  
や。……お前さんさへ、魔のことを御承知の  
上で御覽なさりや、老僕もそれだと勇氣がついて御  
案内が出来ますんでね、こりや私も御奉公に成りま  
すが、何でござえますかい、それぢや愈々行つて御  
覽なせえますかね。」

「何うぞ……」

「廊下は最う暗うござえます、お待ちなせえやし、  
灯を。」

と、本堂へ行けば、いくらもある蠟燭を、先へ一  
人は不氣味と見えて、提灯出して、燃さし一挺。

清三郎は掠めて咳を二度ばかり。

むざと通るは憚るべき、美女の白身を、其處に幻とも辨へぬまで、ちらと視たのでありますから。

「はつ。」

と老僕が、廊下を先へ立つた足を爪立てました。

「はてな。」

「何、お爺さん。」

「ひやりと来たでね。もし、此の板敷が濡れて居

やせう。」

「否。」

「はてな。」

と鱈を突くやうな腰つきで、屈んで蠟燭を、ちよろ／＼と、

「お前様は足袋を穿いて居なさるから分らねえ、確にひやりと感じます。」

と老實に怪訝な顔で、

「もし、年效もござえませんがね、お前様、一つ此の灯を持つて、先へお立ちなすつて、」  
と後退りで、

「これがね、狐狸の頼なら驚きはしませんや。若い時は小博奕の一つも打つたものでござんすが。」

と低聲で呟くのを、聞きながら、清三郎は先へ立つて、静と本堂へ入る時、蠟燭を袖に圍ひました。燈に照る袖の色は、一段優に見えました。

唯、寶錢箱の前、と見ると、はたと袴の膝を折つた。

吃驚して、

「若旦那！」

「こゝは少し濡れて居る。」

「わあ、釧がない。」

と仰天して、平八の呼んだ時、清三郎の手の蠟燭は、金魚のやうに、畳に落ちて、ちらりと泳ぐ。

垢離場の扉も、夕風颯と開いて居る。

能舞臺の憶病口に似た其處へ、衝と肩を斜かひに壇に、片膝を支いた時、目の下の蘆をひらりと行く、白鷺のやうな純白な女の膚を見たのであります。

「あ。」

と言ふ間も最う遅い、つゝじの影の消えるやうに、色ある裾から水に散つて、早や大鉛盤に沈みました。

大小を取つて突出し状に、清三郎は驅下りました。目にも留まらず衣類を脱ぐと、すつくと立つた皓體に、すら／＼と血の満つるのが、朱の刺青に見えませんでした。

森を離るゝ、月は満月。

向う岸の蘆間にかゝつた、色めく衣は、渠の目に、杜若の花、咲亂るゝ。

「はい。」

と絲のやうにニきました、目よりも細い、・・・

・濡髪のお町の聲。

と共に、幽な身悶する。お町は平八の膝に仰向けに抱かれました、其の唇のあたりまで、裾を包んで、胸に、清三郎の紋着を着て居るのであります。

其の袖、肩に引添ふた、美少年は素裸にして。

平老僕は半ば夢中。

「大、大、大丈夫。お不動様の前ですがその。何事も憂慮ねえ、はて、微塵もねえ。の、濡れて氣味の悪いものはあらうけれど、我慢しなせえ。其奴は姐さん、お前さんが、氣が判然としたあとで、自分の手で始末をしなせえ。可かね。私なんざあ、目を瞑つて饒舌つて居まさあ。」

「はい、」

と纔に、又、うと／＼と目を瞑る。

「お爺さん。何、何うしやう。」

「心配ねえ、御覽なせえ、髪もまだ壊れ切らねえ、びつしよりと島田のなりで崩れて居まさ。陽氣は可うがす。．．．．確乎なせえよ。」

「確乎、確乎なさいよ、姐さん。」

「はい。あ、」

と云つて、わな／＼と震へました。

「あれ、貴方。」

「ちよつ、恥しい事あねえ。恥かしが事あねえ。いま、そんな場合ぢやねえ。此の方がね、姐さん、此の若旦那がね、大鉛盤から助出して下すつたんだよ。命の親だ、神様だ、矜羯羅童子だ、人間ぢやあねえ、恥かしが事あねえ。」

お町は其の聲も聞えぬやうに、思ふまゝには得出来ぬ瞳を、たゞ、心をたゞ、身をたゞ清三郎の目に打込むやうに、熟と、瞼に含ませて凝視めて居ました。

「貴方、貴方のお手が、こんな身體に。」

「静として、／＼。」と老僕が壓へて申します。  
悶へる胸を鎮めるやうに。

「私の身體に、お觸りなさいますほどだつたら、  
こんな事はいたしません、申譯はありません、水か  
ら出ましたお刀を、二度も三度も、三度まで、拜借  
をしましたのは私なんですから。」

「おゝ。」と老僕が呻りました。

「爺さんは御存じでございます、御近所の、  
汚れた女でございます、私たちが近よりますと、水  
も濁ります、燈の色も暗く成ると世間の人に言はれ  
ます。――其の汚れが洗ひたさ、血統の血を淨  
めたさに。……毎日、毎夜、――えゝ寐  
られませんが、寐られません、睡られません、夜半に  
も、水垢離を取つて拜みますうち、水の底から劍が  
出て、お不動様の御厨子の裡へ納まりましたと聞き  
ますと、何神様が枕頭に、夢のお告がありましたや  
うに、あの成田の御堂にお籠りして、御利益をおう  
け遊ばした、祐天様を思ひました。――」

老僕は唯、引入れられて頸きました。

「あなたは、御經を覺えたさに、口の中へ劍を呑んで惡血をお吐き遊ばす。私は戀の叶へたさに張切れさうな乳を裂いても、濁つた血を洗はうと、御本堂へ忍びました。堪忍して下さいまし、盗人と、おなじやうに、私が鍵を開けました。親どもが鑄掛屋ゆゑ、見やう見真似に存じて居ります。劍を袖で抱きましても、胸を開けて、あの、此處へ、熟とつけて居ましても、血が湧くやうで熱いばかり、冷く清く成りませんのは、血が淨まつて戀しい方にまだ逢へません驗と思つて。……鹽斷茶斷はしたけれど、親たちが斷食は許しませんもの、せめて、劍を抱いたまゝ水垢離を取りませうと、身體を水に沈めて居ますと、早く此處が、あの、此處が、自分で、切つて、切りたくて、手でむしるほど心が忙きます。最う一度お目にかゝりたさに、生命に未練がありません。出ますものを。まだ突きも切りも出来ません。出来ないでは止められません、すぐにも切つて、切裂いて、血の洗ひたさ、片時も我慢が出来ないのに、切れば生命がなくなります、何うしやうもなく成つて、

劔を水に落しました。

おなじ思を昨夜、一昨夜、二度までしましたので  
ございます。

前刻は思ひがけもなく、一生に唯一度、あ・・・  
・あの時と二度でござんす。・・・・盲目の目  
の開きましたやうに、あなたのお顔が拜めました。」

老僕はきよとんとして、清三郎の顔を見たのであ  
ります。

「最う思ひおく事はない、此の上未練はお恥かし  
い、深望みをしましては罰が當ると存じまし  
て・・・・。」

「や、それで遁げながら、飛び出して、大鉛盤へ  
どぶんかい。當事もない、そんな事に、何だ、何だ、  
何だまあ。」

と獨言のやうに言ふうちに、老僕の片手が、胸ぐ  
るみ肩を抱き、片手で頸を擡げたなりに、濡髪の島

田は摺つて、何時の間にか、清三郎の膝の上へ、枕させたのであります。

ひよこりと立つて、半纏を、又清三郎の白い肩に背後から被掛けながら、

「どりや、最う一つ、心のあたゝまる薬を煎じて來ますぜ。」

と、小博突打つた粹な老僕は、堂も寺も呑込んで、壺を讀んで立ちました。

お町は、濡綿のやうに柔かに、ぐつたりとして居ました。……精根を盡したいまの言葉に、又氣が遠く成つたのであります。

はツと氣がついたか、身をすくめて、

「あれ、貴方。」

「確乎なさいよ。」

「お身體が汚れますよ。」

「馬鹿な。」

と思切つたやうに、潔く言ひました。

「否、貴方はあの杜若を、すぐにお棄てなさいました。」

と、凝視めた涙に、紫の色はなけれど、瞳を紅い露が散る。

少年は、思はず確乎と肩を抱いて、

「高松清三郎一生の過失——堪忍して下さい、

姐さん。」

と齒で刻んで言ひました。

「え、眞個に、」

「あなたよりか……戀しくつて、可懐くつ

て、あれから、よくは寐られません。私こそ。」

と衝と寄せる少年の頬を、今は早や、お町が含んで吸ふやうに、

「あなたのお傍に、お婢に、」

「何、」

「それぢや、せめて、お妾に、」

「いゝや、夫婦だ、妻だ。女房だ。」

「嬉しいねえ。……臨終のきはに。」

と仰あをむ向けなるまゝ島田しまだをば、少年せうねんの胸むねにすりつけ  
／＼、小袖こそでを透とほす胸むねの波なみを、世よを揺ゆするやうに打うたせ  
ました。が、ぢつとして、莞爾にっこりと。

「お幾歳いくつでござんすえ。」

「十七。」

お町まちは颯さつと色いろを染そめて、

「まあ、」

「あなたは、」

顔かほをば、白蓮びやくんの荅つぼみのやうに、片頬かたほに、ツと背そむけ

つゝ、

「私わたしは二十．．．二十一．．．あれ、見み  
ないで、極きまりが悪い．．．若旦那わかだんな。あなたは、此このあ  
間ひだ見みましたより、一層そうわか少すくくてお可愛かはいい。」  
と言いふ下したに、まつ毛げが開ひらいて、瞳ひとみが上うづる。

「苦くるしいかい。」

「．．．いゝえ。」

と言いふ聲こゑも消きえる。

「何どうしたえ。」

「こ、こゝが、少し苦しい。」

とわな／＼と震へる腕を、白々と曲げて、小袖の上から胸を教へる、爪も爪紅、白魚の血汐。

「先、先刻、水へ入ります時、思切つて突きました。逆も及ばぬことゝ存じて、最末練のないやうに。．．．．．今まで、ものゝ言へましたは、お不動様の御利益でござんす。一念の凝つたのが、あなたのお言葉、お情で、いま暖く弛むと思ふと、身が解けるやうに、だく／＼と．．．．．あれわく．．．．．血が流れる、おどきなさいよ、あれ、汚れます。あなた汚れます。あなたが汚れる、穢多の、非人の、血に汚れる。」

衣を刎ねると、乳の下に、鮮血の玉清水。

大鉛盤の底にして、満月の影深く、水は玲瓏として、然も幻の光澄みたるに、白銀の床、碧なす琅の窟の中に、湯具も珊瑚の薄桃色して、魔の椅子に冥りつゝ、胸に剣を抱いて居ました。其の玉なす乳

房に接した時の、清三郎の瞳には、此の凝つて結べる碧血が、一輪の紫の杜若の花に見えたのでありました。

「何が汚れる。．．．．．そ、その血を。」  
と清三郎は、身悶しつゝ、手を手に縋るお町をひと抱きしめて、唇の色のさめぬ間に、湧出づる胸の血を、口にうけ／＼、禺々々とばかり飲みました。

がツクリ膝に倒れた時、面の雪に照映ゆる、氷の如き劍の刃を、縦に含んで、切尖から、血のかたまりを吸ひました。

此時、含んだ唇に、舌に、匂．．．．．鉞、焼、金色、劍の鍛を神會しました。．．．．．

すなは 則ち水底の巖は細工場、窟は吹鞞、椅子は鐵床、湧く紫の玉ちる湯加減、進る血の火加減、色も心も戀人を、其のままに鍛へなす、神の教か、魔の手の名工、當時第一の刀鍛冶。

清三の訓を其のまゝ名告に、みづから非人と銘打

つた、  
巨匠きよしやう、  
非人ひにん清光きよみつは、  
此この少年せうねんでありました。

+

荒地山、荒地中山、杣山、野坂。歸山。鬼ヶ嶽、  
鯖江、鯖波、杉津、匹田。湯尾峠、木の芽峠。峰を  
かさね、嶽を積み、谷を畳み、巨木は天に柱して、  
峯は巖を削ります、近江越前の國境の、九十九折な  
る山路、杣路、羊腸としてある中に、近江の國から  
上り上つて、椿井峠、栃木峠を、虎枝へ出て府中  
(今の武生)へ越えます、其の間、名にし負ふ雪  
の絶所、中の河内の建場茶屋へ――

四月の太陽、午の時過ぎに、――柳ヶ瀬を朝  
立ちした・・・春からづくと、京都近國をめぐ  
り歩行いた歸路の、越前萬歳が、才藏づれにて休  
みました。

「いや、えらいわ。道ぢや。」

で、どかと床几に上胡座をしたのが、ふと眞向ひ  
の床几に、武家方の老人一人、合羽は菱れ、衣類は  
褪せて、半生の経歴の、其のほども思はるゝ、額の  
皺深く、白髪の薄きが、菅笠を傍に、手に杖を支い  
たまゝ、吻として憩つて居たのに心付くと、風俗の  
みすばらしいのを見侮る様子なく、氣のいゝ萬歳。

狭い茶屋ゆゑ其の泥草鞋が、眞正面に老人に近いので、ひたと恐縮をいたしました。

「此は何とも・・・峠越の難澁に、汗を掻きましたのが目に入りましたげで、むさいものを何とも早や、お武家様、眞平。」

と蹲みますと、老人は疊みさうに胸を折つて、

「これ、お手を上げなさい、・・・御挨拶に入る。・・・何の然やうな事を、武家でも構ふ事はないが、第一武家ではありませんよ。」  
と聲は若くて言ひました。

「は、とに角、安心いたしました。なれど、御無禮は御無禮更めておわび申します。へゝえ、お武家様ではござりませぬかな。」

「職人ぢや。」  
「お職人。・・・異なる御串戯を、わはゝゝゝ

と、お商賣だけ愛嬌があります。」

仰山げふさんな笑わらひ方かたに、老人らうじんも頬ほの皺しわを緩ゆるく解といて、  
「串戯じやうたんではありませぬ、職人しやくにんぢや、鍛冶かぢでありま  
す。」

「御職ごしやくが、鍛冶かぢ。．．．あの、」  
と言いつて、傍かたはらのそりへがしの才藏さいぞうと、一寸ちよつと顔かほを見  
合あはせました。

「もしや刀かたなの．．．や、それでは、もし  
や．．．失禮しつれいながら、清光きよみつ様ではござりませめ  
かな。」

「何どうして御存ごぞんじか。」  
と白しろい眉まゆを、鼻筋はなすぢへ寄よせました。

「何なんと、何なんと、何なんと、此これはノ、大先生だいせんせい。」  
と萬歳まんざいが又また膝ひざを折をると、今度こんどは才藏さいぞうもともに、蹲しゃが  
んだのであります。

「都みやこをおたちなさいまして、故郷ふるさとへお歸かへりぢや、  
と諸國しよこくの噂うわさ専せんら、昨夜さくやの泊とまりでも承うけたまはりました。」  
「恥はしい事ことぢや、汗あせがで出でます。」

茶店には小女が一人、茶盆を持つたまゝ呆氣に取られ、山のぬしのやうな老夫婦が、店さきへ出て、此の時手を支いたのでありますから。

「思はずお目に懸りましたは、下僕、一生の面目。」

「お言を頂きまして、へい、恐悦にございます。と才藏も慎んで言ひました。」

「お刀は、諸國お大名の御秘藏、われら式が拜見の折とてもござりますまい。なれども、其をお鍛へなされます、老先生に御意を得ましたれば、おのづから身の守護、諸國遍流のわれら、向後は道中安泰と存じます。麓の霧も晴れませうぞ。」

老人はうつむく額に、杖の尖を當てました。

「さて、眩い……人間おだてには乗るものぢや、旅と思へば尚ほ乗りたい。お言葉ゆゑにお見せ申さう。」

老人は腰につけた汚れた鬱紺の風呂敷から、無難作に、白鞘の短刀を取出しました。

殊勝なり、萬歳。心得がありました。ぴたりと納めて押戴きました時。

「太夫、氣に入つたら進ませう。」

「何、何とおつしやる。」

「故郷への土産に一口打つた、太夫は同國、誰に進ずるも同じ事ぢやよ。」

「えゝ／＼。老先生、萬歳ゆゑに尾籠を申すと思召しますな。百金二百金では手に入りませぬ、お刀を、何として。身分相應と申す事がござります。お禮の眞似が成りませぬ。」

「お堅いな。私も家業、太夫も家業、禮をせいで心持が悪いなら、一さし此處で舞ふて下さい。茶屋の人たちも寂しさうな。私も寂しい、如何ぢやな。」

二人は算で手を清めて、鶴の大紋の衣裳を更め、烏帽子を頂き、謹んで其の白鞘を帯びました。

感謝の涙に聲も濡れつゝ、

「才藏やあ。」

「太夫様。」

……徳若に御萬歳とうや、

ありがたかりける君が代に

越の秘曲を舞ひはじむる。

「酒を下され。」

どぶろくを茶碗にして、非人清光、六十九で。

「山家は春ぢやな。」

其處に、街道の山の裾に、此の茶店の、物置らし  
い納屋があつて、鍋釜も見えました。屋根にかざし  
て桃の花のくれ咲。横手の岨の巖を削つて、せん  
／＼と落つる清水の流に、杜若が二三輪。

スツと立つた、美しい鳥追が、庭常の花にすいて、  
しなやかに、手を鳥追笠に、淺黄の紐に凄いほど色

の白い、嬋娼たる顔を上げて、舞ひ澄ます萬歳を見  
た、眦を、熟と清光に向けてにつこりすると、老人  
も微笑みました。

が、鼓の音に、桃の花のちら／＼と、素袍を翻す  
山風に、清光の又落涙した時、鳥追の姿はふつと消  
えて、笏に響く、あの幽なる溪河が、琴にあらず、  
琵琶にあらず、三味線の音締を傳へました。

【完】